

# 幼兒教育研究雜誌

## 母親と子ども



### 第九卷第四號

#### 目次

- 保母合唱の歌
  - 英國民の特色
  - お伽噺を讀ませる上の注意
  - 唱歌のうたはせ方
  - 遊戲場の價值
  - 惣菜料理
  - 春の旅行
  - 文苑
  - 雜錄
  - お伽訓話「不思議の布呂敷」
- 
- |   |   |    |   |   |   |   |   |   |      |
|---|---|----|---|---|---|---|---|---|------|
| 如 | 三 | 肥塚 | 千 | 石 | 樂 | 後 | 應 | 下 | 〔細川〕 |
| 柳 | 作 | 塚  | 歳 | 井 | 天 | 藤 | 谷 | 田 | 奥好義  |
| 子 |   | 山  | 子 | 泰 | 子 | と | 小 | 次 | 作曲   |
|   |   | 外  |   | 次 |   | せ | 波 | 郎 |      |
|   |   | 數  |   | 郎 |   |   |   |   |      |
|   |   | 名  |   |   |   |   |   |   |      |

フーバー會發行

# 會告

來る四月二十一日の總集  
會には例年の通り參考品  
展覽室相設け度候に付精  
々御出品下され度御願申  
上候

明治四十二年四月

フ  
レ  
ー  
ベ  
ル  
會

## 本會役員

會長	東京女子高等師範學校校長
主幹	東京女子高等師範學校教授
庶務幹事	東京女子高等師範學校保姆
會計幹事	東京女子高等師範學校保姆
庶務幹事	東京女子高等師範學校保姆
庶務幹事	東京女子高等師範學校保姆
庶務幹事	東京女子高等師範學校保姆
編輯主任	東京女子高等師範學校助教授

高村	中田	大雨	小田	和關	川口	武井	福田	福田	和下
秀五	ト	ト	網	實	實	實	實	實	實

## 質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは諸上で説明します。

## 入會又ハ購讀手續(振換口座一七二六六)

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年分をまとめて振替貯金へ御拂込下されば直に登録して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい。

- 一冊郵税共金拾一錢
- 六冊前金郵税共六拾錢
- 拾二冊同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

## 第十四回總會通告

來る四月廿一日(水曜日)午後一時半より東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て左記の順序に依り本會第十四回總集會相催し候に付萬障御繰合せ知友御誘引御出席相成度候也

- 一 開會の辭
- 一 會務の報告
- 一 役員改選
- 一 來賓演說
- 一 保育唱歌及遊嬉
- 一 參考品展覽
- 一 茶菓

追て當日參考品別室に陳列致置候に付開會の前後に御覽下され度尙會員諸君よりも多數御出品下され度御願申上候

明治四十二年四月

フ  
レ  
ー  
ベ  
ル  
會

## 本會玩具研究部贊助員募集

兒童玩具の研究が日一日益識者の注意を牽きつゝあるは是れ寔に悦ぶ可き現象なりとす。本會に於ても夙に二三の熱心家に因りて玩具の良否其改良創作等に關して研究を怠らざりしと雖も實驗の範圍狹少にして研究上遺憾の節多かりき。然れども時勢の進運は本會をして黙止するに忍びざらしむるものあり。因て茲に更に本研究部を擴張し大に斯界の爲めに盡くす所あらんとす。世の玩具研究に同情せらるゝ諸君は奮つて吾人の微力を翼賛せられんことを切望に堪えず。左記贊助員入會規定を添へて敢えて江湖に檄す。

## 玩具研究部賛助員規定

一賛助員諸君の兒童へは其性別年齢個性等に従ひ適當なる玩具を選定して毎月配布するものとす

但し其使用上の注意等は本會機關雜誌、婦人と子ども誌上にて御通知致す可く候

一配布玩具の實費は（營利に無之候へば利益を算入せず）金四拾錢とし別に雜誌代金拾錢合計一ヶ月金五拾錢を申受候但し現在會員は雜誌代不要

一玩具代金は市内は集金人を差出し候へども市外は振替貯金口座一七二六六番へ前納御拂込み相成度候

一入會希望の方は兒童の性別生年月並に御本人の住所氏名を明記して東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會宛に御申込下され度候

明治四十二年四月

フレール會

新しき女學雜誌は現る

# 女學生俱樂部

初號 每月二回發行  
三ヶ月四十五錢  
六ヶ月八十五錢  
直接前金に限る

寫眞版 各女學校校長優等生文士の夫人誌友等 十五面

●女學生に最も必要な心懸 女子大學畢業生正藏  
●何故お姫様風は不可か 女子商業學監嘉悦孝子

讀者 大景品進呈 詳細初號 紙上にあり

●何が爲め女學校に學ぶか 女子學院長矢島楯子  
●呪はれたる女學生 家政女學校幹事白井房子  
●女學生の三大注意要件 實業女學校校長島海岩松  
●女學生に近眼少きか 醫術開業試驗委員須田卓二

見本 入用の方は三錢切手三枚送れば初號一部送る書店雜誌店では賣らず  
●懸賞募集 短文●消息文●川柳●笑話  
●日記文●笑話●謎々●十數種賞金増呈す

幼稚園

## 遊戲的的手工圖形

定價金 五拾錢  
會員壹割引  
郵送費金 六錢

豫て廣告致し置候右圖形出版の儀段々延引致し居候處  
今般漸く出來致し候就ては多分再版は致し兼候事と存  
じ候に付賣切れぬ中至急御注文下され度候

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

フ レーベル 會

(振替貯金口座東京一七二六六)

# 保 姆 合 唱 の 歌

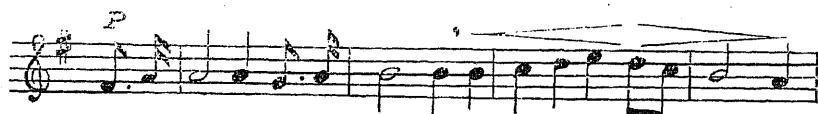
細 川 潤 次 郎 作 歌  
奥 好 義 作 曲



(一) え う ち の そ の ふ は い か な る そ の ふ  
(二) ノ ド ケ キ ハ ル ベ ノ カ ゼ ラ モ フ カ セ



こ こ ろ に ち ゅ さ の た ね ま く と こ ろ  
シ ズ ケ キ ハ ル ベ ノ ア メ ラ モ フ ラ セ



ま き て は つ ち か ひ つ き ひ を へ ー な ば  
フ タ バ ノ ナ デ シ コ サ カ ユ ク ソ ー ノ フ



い ろ か も た え な る は な こ そ さ か め  
マ モ ル モ ウ レ シ キ コ ノ ミ ノ ツ ト メ

一 幼 稚 の 園 生 は 如 何 な る 園 生 。

心 に 千 草 の 種 蒔 く と こ ろ 。

蒔 き て は 培 ひ 月 日 を 経 な ば 。

色 香 も 妙 な る 花 こ そ 咲 か め 。

二 長 閑 け き 春 べ の 風 を も 吹 か せ 。

静 け き 春 べ の 雨 を も 降 ら せ 。

二 葉 の 撫 子 榮 行 く 園 生 。

ま も る も 嬉 し き 此 身 の 勤 め 。

# 英國國民の特色

東京女子高等師範  
學校教授 文學士 下田次郎

本稿は去月二十七日、赤坂區役所樓上、通俗講談會に於て同氏の講演を摘録せしものなるが、同氏の校閱を経たるものにあらずれば、文責は一に記者に在り。

武力では日本は一等國であるが、富力其他精神上では一等國ではない、即ち物質上精神上あらゆる點に於て、世界の一等國たる英國國民の特色に就て、少しく語つて見たい。

英吉利は日の入らない國である、其屬國の大なるものは、印度加奈太等で、其小なるものに至つては、記憶のよい小學生でも骨の折れる位である然るに日本には澤山ない、凡そ物忘れすることは悪いに極つてゐるが、併し屬領の島々は、忘るゝことほど多い方が宜しい、そうして英國は、香港シンガポール、ポートサイド等の要所々々をも占領してゐる、即ち英金を持つて居れば、世界中何處でも旅行が出来るやうになつてゐる、然るに日

本紙幣ではソンのことは出来ない、又英吉利人は男を女に化する外は、何んでも出来る、實際に於てもシカ信ぜられることが多い、即ち吾人の出來得ないと思ふことを、英國人はやつてゐる、例へば今の香港を拵へるにしても、あの熱病などの流行してゐる廢地を開いて今日あらしめたのである、又彼の浪荒きコロンボに防波堤を築き、以て碇泊に便ならしめ、今日のコロンボ港たらしめたのである、即ち英人の前には天然は從順である、山も川も皆征服し得べき道を知つてゐる、換言すれば男を女化する外は何事をもやり得るは、英國人の特色である。

次に英國人は自ら世界の中心國であると信じてゐる、丁度支那人が、自國を中華國と誇稱するやうに……何れに行つても英國人は、本國人は自分である、其國人は客人なるかの如くに思倣してゐる、何れに行つても悠長に重々しく構へてゐる、自分は一一人であるけれども、其背後には大英國在るぞと考ふる如く見える、丁度本邦人が、他邦に行つて、我は武名赫赫たる日本人であると誇るやう



に……、併し本邦人も數年前までは此自信なく、  
 到る所「ヒケ」を取ることが多かつた、又先方でも  
 今日（こんにち）のやうには敬意を拂つて呉れなかつた、私が  
 獨逸に居た頃は、吾人を目して猿であると言へば侮  
 つたものもある、彼等こそ茶褐色の毛が生えてゐ  
 るから、寧ろ猿に近いではないか、然るに今日は  
 吾人を尊敬して日本人様と崇めてゐる、是れは申  
 すまでもなく戦勝が興へて呉れた賜物で、とにかく  
 國民の自覺心を喚起した、英國人は決して他に  
 同化されぬことを誇りとしてゐる、相手をして自  
 分と同様な眞似こそせしめるが、自分は決して他  
 の模倣はしない、英人は英國の物と第一等とは同  
 様であると考へてゐる、吾々日本人も英國人の如  
 く、何處へ行つても日本的と言ひたい、即ち善い  
 ものに言ひ、悪いものに言はぬやうにしたい、英  
 人は一人一人獨得の特色があるが、日本人は一人  
 一人著しき特色なく、團栗の丈比らべて、著しい  
 強い人格がない、平凡な同じやうな人が多い、英  
 人は、或詩人の言へるが如く、無數の人格の國民  
 であつて、人々皆異なれる人格を有してゐる、日

本は英國と同じく、島が根の上にある、そして其  
 上なる人間其物は皆人格であるやうにしたい、弱  
 い國民は浮島である、私は、トルコ、ルーマニア、  
 オーストリア、セルビア等の國民に接したが、成  
 る程貧弱の人民らしく、重みなく、こせこせし  
 てる然るに英人は一人にても惡るびれない、日本  
 人もどうか何處に行つても、予は日本人なりとの  
 自信があつて欲しい、かくて始めて深みのある人  
 間となるものが出来る、彼の歌に「底ひなき淵やは  
 噪はぐ山川の浅き瀬にこそ荒浪は立て」とある如  
 く、淺い人間である丈それ丈、容易に泣きも笑ひ  
 もする、英人は深みのある人間で、容易に泣きも  
 笑ひもせぬ人間である或人は慰むべからざる人間  
 なりといつてゐるが、げにさうである、英人は戦争  
 に勝つても負けたやうな顔付をする——奥底の知  
 れぬ人間だが、日本人は極めて善く泣き、又極め  
 て善く笑ふ人間である。何れにしても今少しく大  
 きくしたい、日本人は人生の根本よりして、大な  
 る笑がない、泣く以上の深みがない、人生問題宇  
 宙問題に對しても深みがない。

次に英人は極めて眞面目なる人間で御世辭のない國民である、英人は心にも無いことを謂はない不賛成ならば一時の都合で物を言ふことはしない英人は身體の全體で話す人民である、然るに日本人はイヤといふことは餘りせない、婦人會などで皆賛成の議決をなすことがあるが、然らば其内心から眞實に賛成したのかといふに、ナカ／＼さうではない、會後に可なり御勝手な御異見を述べられるのが多い、否男子でさへ時に御附合の賛成が多い、ノーを云へない押ししの弱い國民、外交にても否を云へない時には損をする、英人は無愛想の人間だが、よく附合へば、英人程親切なものはない懸値がない、當になる、承知すれば眞に承知する佛人より見れば何となく不愛想である、併し英人は其代り御世辭なしの正直をいふ、嘘の親切よりは、誠のノーの方が、却て其人のために親切である、併しナカ／＼近寄れぬ國民で、友達となるまでには可なり手間が取れる、同じ料理屋で隣席に坐を占めても、誰かの紹介がなければ、話し合はぬ國民である、昔達摩は九年間物言はなかつたさ

うであるが、英國に於ては、紹介は一の宣誓である、然るに日本では、紹介を迷惑のなすりつけとしてゐる、私も此紹介のために随分迷惑をしてゐることがある、日本では不信用者を紹介するが、英國では決してさうではない、他人から「汝はウソつきだ」と悪口されるのは、懷劍を胸に擬せられるよりもつらい、日本人には、十二ヶ月の外にウソツキといふ月がある、英國の或賣卜者は、自分の死ぬ月を占つたが、さて愈其月となつたがどういふものか死ねない、そこで前の占を確實にするために自殺したといふ滑稽話がある、英國では、銀行で金を預けても、別に請取書は出さぬ、日清戦争の後、我國で、賞金一億圓を英國銀行に預けたが、別に請取書は取らなかつた、時計を直すにも受取を取らない、漁車に乗る時荷手物を頼んでもチツキを呉れない、私は滯英の際、スコットランドからグラスゴーまで小荷物頼んだが、別に受取は呉れない、愈グラスゴーに着いた時、あれは私の物ですと話したら、すぐ渡して呉れた日本では受取のあるものでも無くなることがある

此間新橋で何か無くなつたとかいつて大さわざをしたさうだが、私も或時遠方から松茸を送られたが、どういふものか、松茸のそここに孔がわいてゐた、瀝車の中にも鼠が居ると見える。これだもの、荷物を合鑑しなくてはどうして渡しませうか、英國人は仕事は眞面目で、時間は確實に守る國民である、日本人の仕事は遊び半分だ、大工などの仕事の様子を見るに、朝は火にあたつてゐる御晝にも話語りしてゐる、それで何時仕事をするか分らぬ、そこで日本人の仕事には必ず番人がゐる、番人がゐるねばゴマカシが多い、かくて多くの仕事には多くの番人が要る、若し日本全國の番人を數へたらなかに人の數であらう、人物の不經濟は是れより甚しきはない、英人は働く時は一生懸命に働く、日本人は遊ぶのか勉むのか分らぬ。従つて朝から晩まで働いても正味は少い、又働く勢は弱い丁度、種油の行燈と電燈との如く、其熱度光度が非常に違つてゐる、従て英國品は、丈夫だ、よく永持する、品物に飾りがないが持てる。嘗て文科大學英文學講師にハーンといふ人があ

つた、此人が日本人の特色として、日本人は恒久の性なく、箸にても杉箸を用ひ、穿物も下駄をはき、障子でも紙で張換へ、家でも一寸したものを建てる、是等によつて考へて見ると、日本人は遊牧の民ではないか、即一寸やりかけてはヂキやめる氣質あるのは、畢竟是れがためではなからうか、現に伊勢大廟でさへも二十年毎に改築する掟ださうだ、最も是れは古から清淨を好む邦人の氣風にも因らうが……、火山が多かつたり。水でも性急に流れる。變化の多い風土國であるだけ、従て人民は斯無常性非恒久性を有せるなるべく、又他面に於ては佛教も其原因であらうと、ハーンは言つてゐる、然り日本には、羅馬や希臘に於て見る如き、壯大な神社佛閣等の遺物が無い、最も是等建物のないのは、國の富力にも大關係がある、英國内は、中々充實しない、日本は資力乏しい、國力充實しない、御一新後、富は殖えたが、マダ貧乏だ、韓國の貧弱なるは、好き時分に役人に掠奪誅求せらるゝから、實物を地中に隠匿し、他方に於ては働いても詰らぬといふ氣となつたか

らだ、日本でも代官時代には、時々是に類したことがあつた爲に、人民の發達に向て、幾分か阻害を與へ、以て今日のやうに貧乏を持來す一原因ともなつたと思はれるが……、我が國今日の文明は火事場拵一急場拵間に合せた、電線などの外觀の見苦しさ、大體は土中に架けるが至當だ、十年も二十年も保存の出來る電柱が欲しい、英國は汽車の中でも、腰掛がフツクリしてゐる、ネルソンは、貧乏は打勝つべからざる罪惡なりといつてゐるが、英人は非常に貧乏を嫌つてゐる、詩人某も亦、英人の貧乏は不名譽なりとさへいつてゐる英國の紳士といふ語は、人といふ意義の外に、金は有るといふの意義である、左れば英國の政治家は金を持つてゐる金がない政治に奔走する人はない、然るに日本の政治家を通觀するに、金がないのが常だ、一體政治は人が道樂に爲すべきもので、金の無い者がやるべきではない、支那の格言に恒産なき者は恒心なし、衣食足つて禮節を知るといふやうなことがあるが、是れは眞理だと思ふ良心を賣つたり、思はぬことをしたりするのは、

つまり金がないからだ、左れば國力を充實するに、人民各充實せざるべからず、人民各充實するには先づ富まざるべからずだ、故に英人には生活難といふことは餘りない、大學教授などに時間の餘裕あるは、一は研究時間を多くさせるのと、一は私立學校などに出張するの時間を與へるためだ貧すれば鈍する、物質的に精神的にすべての物は發達せねばならぬが、私は其中で物質の方富力に重きを置きたい、固より物質夫自身は最上の物だとは考へてゐぬけれど……、英人は借金を恥づる借金をしまひと思つて、一生懸命に働く、若し一度借金すれば必ず返す氣で借りる、そして大に働く、是れがために、英人は必ず一藝に秀でゐる、故福澤先生は、逆立は藝にあらすといはれてゐるが、併し是れも考へ様によつては一の藝たるを失はぬ、英人は一藝のみならず多藝に秀でゐる、えらい人程多藝多能で、其本職は果して何であるか分らぬ、日本人は餘りに専門的だ、工夫になどなると、目に一丁字がない、趣味が殆んど分らぬ然るに英人は多藝だ、かくて一方に於ては貧乏を

補ひ、一方では飽く迄も獨立する、貧乏の乏を辛  
棒の棒で防いでゐる、併しどんなことがあつても  
決して因つた顔をせぬ人民である、エマルソンは  
英人は自分の物ならば何んでもよい、帽子なども  
破れたのでもよいといったが、流行を追うて、め  
かしこむ人間は頼もしくもない、潮の泡の如く頼み  
にならぬ、婦人は流行を追ふもの、自信力乏しき  
もの、日本人には流行を追ふもの多さが、英人も  
追ふけれ共、併し其上に超然としてゐる所がある  
日本人は随分己を空しくする、今日の文學にても  
無暗に人の名前を並べる、教育學にても西洋人の  
名前を臆べる、己を空しくして餘所のことを覺え  
てゐる、日露戦争は、成る程武力にてこそ露西亞  
を征伐してゐるが、併し戦後露國文學は盛んに  
我國に輸入されたのである今日の文士などは露國  
文學の紹介に大に力めてゐるが、纏つて日本の文  
學は如何、何に依て露國に紹介されてゐるか、も  
とく文學は、一般的世界的のもの私すべきもの  
ではないが、日本文學の彼に紹介されたものか  
何もないと考へたら、非常に心持の悪いことでは

ないか、彼の戦捷の凱旋門に比すべきものが、我  
が國の思想界にあるか、かくては思想界に於ては  
露國に征伐されてゐる、是れ果して一等國の人民  
の面目か。

英國は一等國として、如何なる方面にも「グレ  
ート、メン」といふものがある、如何なる種類の人  
の會合にも、一座の中必ず「スー、グレート、メン」があ  
る、日本には武力の榮名に比すべき程の榮名がな  
い、日本は將來ある國で、其前途は頗る愉快であ  
るが、併し一等國としては遺憾なることが多い。  
又最後にいはんか、英人は大に運動を好み、運  
動は國民生活の最大要部となつてゐる、夏はクリ  
ケット、冬はフットボールが國民遊戯となつてゐ  
る、夕方になると方々の運動場にいつて見ると、  
大人と小人とが入りまじつてやつてゐる、或人の  
語に、英吉利の景色は球が飛ばねば完全でないと  
いつたが、實に恣程運動は盛んである、千八百九  
十二年の調査に由れば、倫敦市に於ける運動場の  
數は實に千有餘である、然るに東京市には、僅に  
日比谷公園に一ヶ所あるのみだ、然も學生のみが

運動してゐる、横濱市に外人運動場があるが、是に對すべき程の運動場はない、早稻田や慶應では運動熱盛んで、時々彼等外人とこゝでマツチをするところがあるが、彼等外人は多く、番頭や手代の類である、然らば彼等とマツチして勝た所が餘り名譽でもあるまい、英人は運動は飯よりも好きであるか、れば身體に彈力あり、いつも若々しい、然るに日本人はデキに年寄りたがる、我國に於てもモ少し運動場が殖え、英人に對すべき老人運動場があつて欲しい。

ルーズベルト氏は、大統領任期満期の曉には、亞弗利加に行き、猛獸狩を企つべしと傳へられてゐるが、英人も猛獸狩を好む人民である、日本人にも此氣象はあつて欲しい、日本の獵夫が、雀や雉子位を撃つて恐悦がつてゐるが、何んぞ進んで朝鮮に虎を狩り、北海道に熊を射止めぬのであらうか、駄小説や、戀愛談に耽溺して、國民の士氣萎靡沈滞して大に振はず、此勢で進まば、次回戦争には如何にするか、英國の新聞を見れば、虎に肩を咬まれたといふ記事があるが日本の新聞

を見れば、電小僧のために二段迄紙面を惜氣もなく埋めてゐる、英國の今日あり、英人の斯特色ある決して偶然ではない。

夫れ日英は同盟國である、物質的に彼より利益を受くべきは勿論であるが、其以外に、即ち精神的にも大に彼に學ぶ所なくてはならぬ、是れ吾輩が、英國民の特色と題し、彼の長所に就て聊か縷々した次第である。

●嘉納治五郎氏の女子の心得

去月二十日青年會館に於ける東京女子音樂學校樂媛會に於て全氏は今日の女子の心得を説かれ左の七條を上げられたり。

- 一 身體の強健ならんことを心掛く可し
- 二 まめやかなる可し
- 三 事の大小を辨へよ
- 四 本務を知れ
- 五 外事に注意せよ
- 六 夫を知れ
- 七 園の大勢を知れ

# お伽噺を讀ませる

## 上の注意

巖谷小波

三田文學會にての講演の一節にて筆記の校閲を賜さるゝ故に文責記者にあり

### ◎兩親の誤つたる見解

お伽噺と言ふと何故かしら世間の人は、憊う教訓の意味をふくむものだ、と解してゐるが、私は決してさうのみに限らないと信ずる。お伽噺の第一の目的は兒童に面白く讀ませると言ふのにある。お伽噺を菓子にでも譬ふれば、毒にもならないければ、藥にもならない菓子と言つたやうなものでよいので。讀んだ後まで悲しみが頭に残つてゐたりするんでは、粗惡な砂糖で製へた菓子が、喰つてから腹にたまつてゐると同じて、害になるとも藥用にはならぬ。

それと同じく教訓的にすれば、興味を減ずる。學校で教へる修身に面白味を幾分添へた位のもの

にしかならぬ。それでは詮方がない、だからお伽噺は興味一點張りて好いのである。これは教訓的のものだから讀めと、子供に突きつけた所で、決して子供は面白く思つて讀まないのみか、母なり父なりの前でいや／＼讀むから却つて害になる又教訓の積りでかいても、人はさうとらぬことがある。それは人の勝手手で、恰度鴉がカウと啼くのをきいて、孝行しろと言ふのだ、雀がチウと啼くのをきいて、忠をしろと言ふのだと、人がきめるのと同じことだ。鴉に問ねたつて、『俺はそんなことを言ひませぬ。』と言ふだらうし、雀にきいたつて、『私しやそんなつもりぢやない。』と言ふだらう兎も角、教訓など言ふことは、お伽噺最初の目的ではないのである。

### ◎昔のまゝのお伽噺は殆ど駄目

日本にも随分お伽噺が昔からあるが、もう現代の子供には通じないものがある、それ許りでなく日本のは消極的で、あれも仕てはならぬ、これも仕てはならぬ、人真似もいけぬ。慾を張つてもいけぬと皆抑制してゐる昔——徳川時代はこれだな

くは、世が治らなかつたらうが、もう今日の子供にこんな消極的な因循な道德律の下に、出来たものを讀せては害になるとも、よいことはないのである。怒張れ人真似もしると言ふやうに、凡てが積極的にゆきたい。それから今日の世の中に仇打ちなども面白くない。昔は幾分獎勵した氣味もあつたから、父の仇を子が打つすると相手の子がまた仇を打つと言ふ風に、何日まで行つても親子ツコで果しがない。今では第一法律が禁めてゐる

◎「舌切雀」と引込思案

日本在來の、お伽噺は殆ど悉皆消極的なもの許りだと言つたが、それ許りでなく、どれを見ても善と假定されたものが榮えて、惡とされたものは罰を受けて、めでたし／＼になつてゐる。そして進取の氣のない、引込思案なものの許り出て来る。私はあれも面白くないと思ふ。『舌切雀』にしても、あの爺さんはよく日本人の善くない性質が現はれてゐる。雀のお宿へ訪ねて行つた歸途に、お土産に大きな葛籠がよいか、小さな葛籠がよいか、と言はれた時に、

「私は年をとつてゐるから……。」

と意氣地なくも小さなのを貰つて來た。この意氣地なしに、澤山の賞美をやつてゐる。それから隣の婆さんが、お爺さんの真似をして行つた歸りに大きなついでら貰つた時、

「私は年寄りでもまだその位のもの背負はれる。」と奮發したこの心を賞せず、罰を與へてゐる。私から言はせると、爺さんは日本人の骨惜みな早く老い込みた、少しでも樂をしたい性質——人間として忌むべき性質を發揮するのだから、罰を與へ、婆さんにはその殊勝な氣心をほめて、賞品をやる。這麼お伽噺を小さい時から聞いて育つて來たものだから、明治維新の頃、あの大きな葛籠の樺太には怪物があるものだらうと云つて、元々自分のを他人にやつて、千鳥の軽い小さな葛籠を貰つてだまつてゐるのだ。これだから我子供には大害である。

◎「かち／＼山」と動物虐待

又「かち／＼山」もさうだ。何んの惡さも仕ないで、お山でひるねかなんかしてゐた狸を、捕へて



四ツ足を縛つて天井へ釣るす。實に残酷だ。天井へ釣したばかりでなく、傷火をさした上に、藥など、言つて、唐辛子味噌をなすつてやり、その下には品川、海だか何處の海だかへ、土舟など沈めて了ふ動物虐待の甚だしいものだ。狸が婆さんを殺したのが悪いと行ふかも知れないが、あれだつて狸から言はせれば正當防衛である。又婆さんは爺さんの留守に搗いて置かなくてはならん麥を、つづのが面倒なものだから、狸が、『もし、お婆さん、お骨折れでせう、私が代つて搗いてあげませう。』

と言つたのを幸ひ、依頼心とするけ根性をだした罰で仕方がないのだ。狸は婆さんを殺さずに逃げたへば、なほよかつたのが、それではお話しにならぬからだ、その他のものにしても、悪人が亡ぶと『めでたし』と局を結ぶが、これは私は不賛成だ、狸にとつては鳥渡もめでたくないのだから『めでたくもあり、めでたくもなし』とす可きである。

この他『花咲爺』でも『猿蟹合戦』でも皆んな這麼

風の消極的のものが、たゞ一つ今の子供に見せてもよいものがある。それは『桃太郎』だ

### ◎『桃太郎』進取の氣象

この『桃太郎』だけは、澤山ある日本のお伽噺のうちで、趣が異つてゐる。私の考へではどうも日本のものぢやないらしい。それと言ふのは、歐羅巴にもこれと同じやうなのがあつて、その出所は印度である。して見るとこの『桃太郎』は何日の時代かに日本に渡つて來て、日本化されたものだらうと思はれる。在來の他のお噺に比べて見ると、實際さう感じるのである。

この『桃太郎』は今の子供に讀ませても結構、始めから終りまでめでたくもあり、勇ましくもあり進取の氣が横溢してゐる。あのお爺さんを御覽なさい。あの年をして山へ柴刈りにゆく。そして國の爲のんべんぐらうとしてゐるは相濟まぬと、一生懸命にはたらいてゐる。又お婆さんはお爺さんばかりにはたらかせて、この息災な身體をしてのそ／＼してゐては申譯けない、と川へ洗濯にゆく。實に見上げた心掛けである。そしてお婆さん

川へ洗濯に行つた時、たいならぬ大きな桃が流れて来た。舌切雀のお爺さんやなんかだつたら、恐ろしがつて逃げ歸つて了ふのだらうが、このお婆さんは、

『こんな大きな珍らしい桃をお爺さんに見せたらば……』

と早速拾つて持つて歸る。エライ氣象だ。夫婦の情愛も見えてゐる。それからお爺さんと桃を割いて見ると、これはしたり、中からは赤坊が出た。通常の人ならば腰を抜すのだが、氣丈な二人は、

これは幸ひ、二人にはまだ子供がないから……とて自分の子供にして養育する。桃太郎も段々大きくなる。學校へ通つたかそこはわからぬが、兎も角大きくなつた。唱歌に、

桃から生れた桃太郎、  
氣は優しくて力持ち、

とあるが、氣は優しくはなく、剛氣であつて、腕白小僧であつたらしい。それでなくては、人も通はぬ鬼ヶ島へ一人で征伐にゆく氣にはなれぬ。  
桃太郎が鬼ヶ島へ征伐にゆくから、ひまを下さ

いとお爺さんお婆さんに頼んで快諾を得た、これが日本のお婆さんお爺さんならば、  
『まわ、まわ、そんな危ぶない所へゆかずに、家にて呉れ。』

位を言ふに違ひない。然るにこの桃太郎のお爺さんお婆さんは大喜び、何の仇もない鬼征伐へ喜んでやつた。黍團子を澤山製へてやつた。桃太郎はそれを持つて喜んで出立した。途中で雉子や猿や犬をお供にしたり、鬼を征伐したのは御存知の通りであるが、桃太郎が、黍團子を持つてゆくと雉子が出て来て、

『桃太郎さま、お腰のものは何んで御座る。』

『日本一の黍團子。』

『一つ下さい、お供申す。』

『一つはやらない、半分やる。』

と言ふやうになつてゐるものがあるが、これは好ましくない、これは吝嗇な家のお母様かい作り替へたものだらう。どうしても鬼ヶ島を征伐すると言ふ意氣込みのある、桃太郎の言ひさうなことぢやない。これは、

「一つはやらない、みんなやる。」  
の方が桃太郎の度量が見えてよい。

◎お伽噺の感化と未來の國民

これからの子供にはかう言ふ風なものを讀ませなくてはいいけない。歐米のお伽噺は鬼を退治すると御賞美にお姫様を下さるとか、皆進取の氣象を養ひ、健剛な氣を養ふやうなものの計りである。歐米諸國の人が今日あの様に盛んに手を外國に擴げてゐるのは小さい時から讀んだり、さいたりするお伽噺が皆桃太郎のやうなお噺ばかりだから、自づとその感化を受けてるのである。日本もこれから、因循な姑息な今迄の童話を破つて、小さな時代からさう言ふ進取の氣、剛健な心を鼓吹しなくてはいいけぬと思ふ。かゝるお伽噺を作るのも、日本を富國、強國にする一つの手段である。



唱歌のうたはせ方 (承前)

後藤ちとせ

右の諸注意のもとで精選された唱歌は如何なる方法で歌はせるが宜しいでせう素より子供の事ですから唱歌の時間と申しても靜かな時もあれば騒がしい時もあり、突然泣き出す子供も出れば何か外來の刺戟のために忽ち注意の亂れる時もありますから歌はせ方も臨機應變にやつて參るが必要ですが其の間おのづから採るべき方針方法がある外形はどう變つても骨髓は一つと思はれますので、其骨髓とも標準ともいふべきものを左に御話しいたしませう

一、新材料の場合

(1) 準備

新しく何か歌はせる事になりましたなら保育室に出る前に少くとも左の準備が入ります  
(イ) 樂器練習を十分になし且保育者自ら該唱歌に習熟すべき事

(ロ) 歌詞の了解を十分ならしめんがために實物標本又は繪畫の類を用意する事  
(ハ) 幼兒の收得するに便ならしめんが爲該唱歌を數段に分つ事

一定の時間内に幼兒等が覺え得る分量には限りの有るもので御座いますから一時に澤山教へ込んで却つて好結果を得る事が出来ません寧ろ少しづつを確實に記憶させて行つた方が幼兒も苦しまずに面白がつて十分おぼえ込み却て進みが早う御座います、で新材料は先づ之を左の諸注意の下で數段に分ち時を追つて幼兒の了解し得る丈づつを教へて行くが宜しう御座います  
(一) 唱歌の難易により分ち方に斟酌すべきこと  
(二) 幼兒の年齢により分ち方に長短あるべきこと  
(三) 歌詞の續き工合を考ふべき事  
(四) 該唱歌に對する幼兒等の既知の度合により授くべき分量に差違あるべきこと(上)

(2)

(イ) 歌はせ方

發聲練習

の組の幼兒等のうたふを聞き略を知り合つて居る唱歌は少しも耳にせし事なきものよりも澤山教へてかまひません  
(二) 幼兒が未だ聞き知らざる全くの新材料を授ける場合には兩三日前より何かの折に(例へば食前幼兒の氣を鎮める爲にとか又は保育室への出入りの際にとか)其歌曲を弾き用ひて聞きならし置かしむる事

初以上の準備が済み整頓した保育室に保母幼兒等より成れる唱歌の團居が出来ましたなら先づ第一に發聲の練習をするのが順序で御座います、入園したての極く小さい子供には先づオルガンの音と全じ高さの聲を出させる稽古のためには調のG位の聲をPの音でオルガン及び保母と共にうたひ出させ進んでは三間音をア、オ等出しよき音で發聲せしめ更に最上組に至つては音階の練習をもさせ得る様になります。發聲の練習

(ロ)

は音量を増し美聲を養ふ基礎ことに深呼吸の代用にもなり外遊に於て思ひ思ひに遊びに耽て居つた幼児等の心をひとつにまとめ「さあ是からは唱歌の時間だと思はせる方便にもなるので御座いますから唱歌の時間の始めには暫時必ず此練習を怠らぬがよろしう御座います但し此際幼児をして十分に充實した聲を出させるには樂器の音も保姆の聲も量たつぷりな美しくて而も力のあるので導いてやらねばなりません尙ほ新材料中の稍困難な音程は發聲練習の際特に出しておくが宜しい様で御座います

新材料に移り方  
發聲の練習の済む頃には幼児等の注意も唱歌といふ事に集注せられる様になり發聲器も唱歌するに程よきほどに慣れたわけですから茲で直く新材料にうつるべきで教授法の言葉を借りて申すなら豫備とか目的指示とか云ふ事をする順になるのです即ち其歌詞の内容につき既知の觀念を呼び起し該唱

(ハ)

歌を授くべき事を話して期待心を起させるのも宜しう御座います又「今日は斯る唱歌を教へませう」というてオルガンによらずに保姆が美聲で歌つて聞かせ何の唱歌かを判断させるも面白かるべく若し夫れ前時間の續きを教へる場合には已に教へた部分を一二回復習させて其日のところに移るべきです

(ニ)

豫備並に目的指示に相當した事が済みまして次ぎには新材料の提出即ち範唱をして聞すべきです範唱は始めて新唱歌に移る際には先づ歌全體を歌つて聞かせ次ぎに當日教ふべき部分を更に歌つてやるべく前時間の續きの際には當日の部分又範唱すれば澤山です是れ第一の場合には大體どんな歌だかを知らせて「ア、早う皆ならひたい」と云ふ心を起させる必要があるからです

歌詞の口授  
幼兒は文字が讀めませんから歌詞をおぼえ

- (ヘ) 歌詞の意義を話させる事
- (ホ) 歌曲に合せて數回練習
- さすのは口授に限られて居ります。當日教ふべき部分の範唱が済みましたら、次ぎには歌曲を離れて歌詞を口授するので、御座います。すが幼兒は發音が誠に不完全で殊にサ行とタ行を混同し、清音と拗音とを間違ひ用ふる事が多く中にはラ行のリ、エ等を正確に發音し得ぬのがあります。から此際幾回となく同一歌詞を反覆口唱せしめ、特に困難なる音は其音だけを長く延ばして發音せしめ、(例へば「ユー」或は「リ」といふ様に)容易に出来ない子供には獨りて發音させて見るなど種々の方法で正確な音を出さしめ、正しく歌詞を收得させねばなりません。一度間違ひが染み込んで後は容易に訂正が出来ぬものです。
- 但し此際には先づ樂器を用ひず、保姆の歌ふにつれて小聲で二三回うたはせ、次ぎに樂器に合して大きい聲で歌はすのが順で、御座います。

- (ト) 練習
- 意味が大體わかりましたなら、讀み方教授に於ける達讀の時の如く、こゝで十分歌ひ方の練習をなし、巧みに歌ひ流す様にしあげなければなりません。但し幼兒は倦易いもの、變化を好くもので、御座います。から練習の方法も亦此様に應じ、或は腰かけて、或は立ちて、或は一齊に、或は單獨に、或は男兒にのみ、或は女兒にのみ、或は前列に、或は後列に種々變化ある方法により、無用の言葉を用ひず、敏活に歌ひ進みて、少しの倦怠をも感ぜしめず、愉快
- 歌ひ方が、ざつとわがりましたら、次ぎには歌詞の意義を話させるが宜しう御座います。唱歌によつて歌詞の中々六ヶ敷の、ありますが、そんなのは、幼兒の了解し得らるゝ、丈話しても、やり話させも、すべく決して、無理に全體を解釋させる必要は、ありません。君が代」の如き儀式唱歌の如き、皆此點に注意して、無益に幼兒の可弱き頭腦を苦しめぬ様心すべからば、御座います。

に十分の練習を終るは最も望ましき事で御座います但し前時間よりの續きの場合には始めより續けてうたはせ置く様にいたしま

す  
(チ)已に習熟したる他の唱歌を元氣よくうたはせて退出

以上の事々は十五分乃至二十五分間位のうちに致し終るので御座いますから保母はしとやうに落ちつききつた中に敏活な所があつて倦き易き幼児をして倦きさせぬ技量が大事で御座います且つ前にも申した通り右の歌はせ方は只標準を示した丈で御座いますから臨機應變の順序をとり方法を考案する事は至極大切なこと決して杓子定規にいたしてはいけません

(附) 人

新授の際に注意すべきと

一、多量を不正確に教へるよりは少量を確實に教へよ

一、第一の歌を十分了解せしめざるに第二の歌

を教ふべからず

一、保育豫案に執着せず幼児收得の狀態を見て材料を増減すべし

一、全体を一通りおぼえしめなば幼児相應に曲想に注意せしめよ

一、新材料を教ふる場合には復習の際に於けるよりも幼児の心を疲らしむるが故に該時間を短縮せよ

二、復習のさせ方

新授の際には歌詞を暗んじ歌曲をおぼえるのに止まり歌全体を巧みに歌はせて眞の興味を起さしむるは實に復習の如何に依るので復習のさせ方を考ふるのも亦必要な事で御座います左に掲げたのは思ひつきたる二三の方法に過ぎません故此他種々工夫を要する事と存します

一、或は衆兒一同にて、或は之を二分して、或は各組順次に又は男女兒別々にうたはす等の事により合唱の練習をなさしむること  
一、該唱歌を數段に分ち全体の幼兒をも二分若しくは三分し保母のなす簡單なる合圖によ

り始めの一段より各組漸次に歌ひとると讀書に於ける「取り讀み」の如くなす法、例へば「箱庭」の復習の際に全体の幼兒を左右二組に分ち保姆の交互に左右兩側を見るを合圖に左の如く歌ひとらす類で御座います

### 右側の兒

來て見よ君も我箱庭を

### 左側の兒

金魚のひれに波たつ海を

### 右側の兒

帆かけて浮けしつけ木の船を

### 左側の兒

向への岸に吹けく風よ

此方法は幼兒等が絶えず保姆の合圖に注意せなければならぬのと己等の歌の順の廻ぐり來るのを待つ樂しみがあるために面白う

して復習し得らるゝ事が多くあります

歌詞の了解を助け且つは復習に變化あらしむるため簡單なる動作をつけてうたはせる法例へば「蝶」の唱歌の際兩手をもて蝶の形

## 三、

をつくらしめ歌につれて之を蝶の飛ぶに擬せしむるが如き

### 一、

歌詞の一部を變更してうたはせる法（前述の雪やこんくの例参照）

### 二、

獨唱の練習  
但し是は凡ての幼兒をして憶せず保姆の前  
に來てうたふ習慣をつける必要がありま  
すから此際猥りに訂正を加ふる等の事により  
幼兒をして出でて唱ふをいとはしむるの原  
因を造らぬ様に注意せねばなりません

### 三、

唱歌につきての一般注意  
終りに新授復習兩者に通じて必要なる注意數  
ヶ條を述べて談話の御話に移る事に致しませ

### 一、

訂正法につきて  
訂正の言葉は禁止譴責等のいとふべき分子  
を含まざる快きものたるべし（同じに訂正

を加へてもいけません、下手です等云はるゝ  
のところが歌ふ方が奇麗でせう、斯うする  
方が愛らしく見えますなど云はるゝのは子



(供にとつては大した違ひで御座いますせう)  
(口) 誤りは染み込ませぬうちに早く訂正を加ふべ

き事

(ハ) 正しさと誤れると美なると否らざると常に

兩者を聞かして其相違を知らしむべき事  
(ニ) 唱歌は練習によりて巧みになるものなれば

幼兒等の發音不正なる點、歌ひ方の拙き部  
分は保母の模範に倣はしめ敏捷に幾回とな

く繰り返さしめ正しさに至り美なるに及び  
て止むべきこと

(ホ) 賞賛の辭の亂用は訂正の語の力を減せしむ  
る事

一、樂器の位置は保母が之を使用しつゝ十分幼  
兒を管理し得らるゝ様据え置くべし

一、各幼兒個人々々に注意し寒胃に罹れるもの  
咽喉を損じたる者等には強ひて歌はしむる

事なかるべく特に惡聲なるもの調子拍子の  
觀念の欲乏せるもの等は成る可く保母の近

くに着席せしめ之が發達をはかるべきこと  
(甚しく唱歌の拙なるは聴器の不完全なる

に基因する事尠なからざるを以て斯る兒は

耳の検査をなすことあるべし)

一、必要なる言語問答を省き美しき保母の模

範により歌ふ事の練習を多くすべきこと

一、發音の正否は口形に關係多きを以て唱歌の  
折には幼兒をして常に保母の口形に注意せ

しむべきこと

一、幼兒の姿勢に注意せよ

一、大聲にて荒々しく歌はんよりは少聲にても  
美しくうたふ事につとめしめ漸次音量を増

さしむるを可とす

一、唱歌の意味の了解を助けためにつくる動  
作は至極手輕なものたるべく複雑にして遊  
戯と混同するが如きはとるべからず



# 遊戲場の價值

樂 天 子

訓練といふ方面より遊戲場を論ずれば、教場より遊戲場の方がこの訓練の効果をあげるには大なる價值あるものである。近來遊戲の聲大に高くなり何れの地方に於ても遊戲の研究をなすやうになつた。けれども其の多くは單に体育的のみの研究に偏しこの訓練といふ大切な方面の研究をなすものは少ない。彼の今日續々出版せらるゝ遊戲書にして其の一二のものを除きては、深く訓練的事を書き加へたものはない、併しこれにては其の遊戲は單に体育的のものにて僅に半分の價值あるのみである、思ふに遊戲なるものは性來兒童の最も好みて行ふものにしてしかも規律的のものであつて、この間師弟の愛情を生ずるとか、兒童の個性を知るとか、規律に喜服せしむるとかいふ良習慣を養ひ能ふ事はすでに識者の熟知せる事である、その教授時間に於ける一定の遊戲がかかる効果あ

るものとすれば、彼の休憩時間に於て兒童が各自隨意に行ふ遊戲は、寧ろ夫以上の効果を表はすものである。何となれば兒童の個性につきての研究はこの間に於て殊に都合よきものにて、或は意地悪きもの、親切なるもの、大膽なるもの、教師に阿諛するもの等、遊戲場に至りて觀察すれば教場等にて全く知ることを得ざる事實のよく判明するものである。従つて之を矯正せんとするにも教場に於けるよりも大に都合よろしく著しき効果があらるのである、尋常初學年又は幼稚園などにて、入學當時一度も口を聞きたることなき兒童を、遊戲場にて手を換へ品を換へて遂に口を聞かしむる様になし、少しも書きたることも話したることもなき兒童を近頃は級中にて中等以上のものとなしたることも又、級中にて黨派をなし時々衝突を起したるを遂に遊戲場にて打破したる事も、實際経験せることである、併しこれらは教場にて如何に訓練するも容易に出来るものでない、遊戲場にては一言の訓戒的言語を發せざるも、少しく注意すれば之等の効果は直ちに表はれ来るのである、又兒



童の惡しきことを見付けて小言をいふ事が今日普通の事なれども、少しく教育的の眼光にて見ればその大に不都合なるを發見するのである、適當の遊びなくしかも之を監督するものなしとすれば、兒童はさておき大人と雖も随分惡しき行をなし兼まじき事である。彼の益軒先生は禮は未然を防ぎ法は既然を戒しむと言はれた、幼兒教育は固より禮義によりて成立するものにて、法律的の罰は決して必要なるものでない、病起りて藥を服するは已に遅く、病なき時によく養生して病の起らざる様に注意することが大切である、故に幼兒教育は殊に惡しき行をなしたるものを訓戒するより、惡しき行をなすものなきを望まねばならぬ、而して斯くなさんとするには、遊戯場の研究と監督とが大切なるのである、余は幼稚なる兒童の訓練は遊戯場に於て大體の目的は達し得らるゝことゝ考ふるものである。

次に体育の方面より遊戯場を論ぜんに、之は誰も知る所にして今吾人の述ぶる必要もなき程なり、故に余は只左の一事を述べん、能く勉めよく遊ぶ

といひて古より勉むと遊ぶとは、同格にありながら、世人は勉むる方はよく研究するもの多けれども、遊ぶ方の研究甚だ少なし、然るに今少しく研究的に考ふるに彼の學校にある劣等なる兒童につきて觀察せば必ず身体に異狀あるもの多からん、身体健全にして快活なる兒童は、多くは成績よきものなり、之に依て見るも如何に遊ぶことの大切なるか、如何に遊戯場に於ける注意の大切なるか明かに知る所ならん、非常に弱き子供にて成績も惡しく常に運動を嫌ふも、漸々手を取りて運動好きとなし、身体を健全となし成績をよくしたることは、嘗て實驗せることである、此等の事によりて觀るも、余は小學校にてはよく遊ぶといふ事を基礎としたいと思ふ程である、即ち遊戯場の研究に大に力を盡したく思ふのである。かく訓練の方面よりも、体育の方面より大切なる遊戯場とすれば、教師は常に如何なることに注意すべきか、余は左の三ヶ條を以て其重なるものと考ふるのである。

第一愛情、愛情なければ教師の資格なく、愛情な

き教師は如何なる方面に向つても生徒の心服を受けることが出来ぬ、該博なる智識も熟練なる教授法も此の愛情なる連鎖によりて、生徒に結び付けらるゝのである、而してその愛情は遊戯場に於て最も表はれ易く又最も大切なものである、教場に於て常に嚴格の態度を取り居るも、遊戯場に於て生徒と互に手を取り運動するに至らば、彼等は教場の嚴格を恐れざるのみならず、却て之を喜ぶに至るものである、従つて此の間に於てこそ師弟の情誼も起り、教場の教授のみにては到底この真情は得られぬものである、兒童が教師を恐れて、「こゝれい先生」といふ考を持つ以上は、教育の効果も先づ半分以上は達せられたのである、併しこの愛情が所謂姑息の愛とならぬ様に注意することが大切である。

第二規律、餘りに愛情深きものは動もすれば兒童を我儘になすむと云ふことがある、故に規律は是非共正しくせなければならぬ、遊戯場にても彼の無邪氣なる兒童の可愛き儘に、常には赦すべからざる行もつうか／＼と見逃すことがある、又兒童

も遊戯場にては犯し易い併し之にては眞の愛情ではない、如何なる場合にも一度惡しき事なりといひし事は決して赦してはならぬ、又己れの主義としたる事は決して其方針を換へてはならぬ、斯くてこそ訓練の實益をあげ得るので姑息の愛にては却て彼の人の子を賊ふに至るのである。

第三快濶、規律が大切なりとて夫を餘り窮屈に考へたならば、又因循となりて充分の活動をなさぬ様になる、運動場にては教師も生徒も快濶の精神の充滿して初めて其目的を達し得るものである、快濶ならざれば興味薄く興味薄き運動は効果少なきものなることは既に何人も知る所である、只教師が快濶に運動すれば、生徒は従つて快濶に愉快に運動するは明かなる事實である、併し如何に快濶が必要なりとて粗暴とならぬ様に注意せねばならぬ、是又規律の必要なる所以である。

以上述べたる三つの條件は決して獨立のものでなく、互に相關連して其効果を生ずるものであれば教師は常に其注意を要することは勿論である。

併し今日の學校にては何れも手不足にて教場の教

授や事務の整頓にさへ間に合はぬ程で地方の學校等にては到底望むべからざる事といふならん、然れども余が以上述べたる遊戲上の價值より言へば其教場の教授力の幾分を割愛しても遊戲上に其力を用ひたく思ふのである、一定の見識を有する教師とすれば單に教授法の形式や、余り必要なき規則や、帳簿の末にのみ走ることなく小學校令の明示するごとく、兒童身体の發達に留意して道徳教育及國民教育の基礎を作ることには注意せねばならぬ、又訓練の行届きたる上に於て教授法も價值を表はすものである、而して斯ることの多くは遊戲場にて成効することが多く、成効せしむるに便利なることは以上述べた通りである、讀者諸氏は之に依て遊戲場の價值と其の監督上に於ける注意の必要なることを了解せしならん、之れ皆余の遊戲場の眞價を社會に發表せんとする熱情に出でたるものである、幸に諒恕せられ諸士の賛同を得て大に之が眞價を表はされんことを。

## 惣菜料理

石井泰次郎

### 碗 常盤豆腐

豆腐を、一寸厚さ二寸角くらゐに、切り、成るべくこまかに、下まで切り通さずに、横にも堅にも切目を入れる事、菊豆腐の如くなして、くづさぬやう取りあつかひて薄き葛ゆにて湯煮す、葛粉と水とを鍋に入れ、火にかけ、葛のかへる迄箸にてかきまわし居るべし、火にかけて其まゝ置きては、葛粉下に沈みてこげつくなり、注意してかきまわし居るべし、さて葛粉の煮えたらば、切りたる豆腐を入れ湯煮するなり、あまり煮すぎぬやう、あたゝまりたらばよろしきなり、又一方には白味噌を摺りてうらむしなし、なべに入れ砂糖、みりん酒、少しの水等を加へ、火にかけて煉る、程よく煉れし時、獨姑をあらひ皮をむき去りて、卸し金にてすりおろし味噌の中へ入れて交ぜ合し、ほうれん草より

取りたる青粉にて色をつけ、火よりゑろすなり、

あまり堅すぎぬやうに、煉るべし、

さてあたゝめたる豆腐を、しづかに目杓子にてす

くひ上げ、しづくをきつて椀に盛り、右の味噌を

上よりかけて進むるなり、豆腐の切りたる間々へ

青きみその入り、松のやうに見ゆるとて、ときは

豆腐と名づけたるなりと、古くより傳はり居る料

理法なり、

○青粉の取り方は、ほうれん草をよく洗ひ、葉の

みを摘み、摺鉢に入れてよく摺り、水を入れて

又しづかに少しすり、水と合せ、別の器の中へ、

布巾にて漉し入れ、布巾の上になまりたる滓は取

り捨て、下に漉し出でたる水を鍋に入れ火にかけ

るなり、煮えたとつに随ひ、水は清く濟みへはじめ

は青くにひり居るなり、青粉の部分のみ上面に、

一とかたまりとなりて浮ぶ故に、それをすくひ取

りて、用ふるなり、

○原料割合は、豆腐五切れにつき白味噌五十匁、

砂糖二十匁、みりん酒三勺、水五勺、うどこ一本

ほうれん草小一把位なり、

小皿 玉子焼まがひ

(原料)

水蕨十枚、醤油二勺位、玉子三箇、

砂糖三匁、

水こんにやくを水に浸し置き、しばらく上げて鍋に

入れ水を加へて湯煮し、再び水に取り、冷し、し

ぼる、

鶏卵を鉢などへ割り入れ、醤油、砂糖を加へてよ

くかきまわし、しばらくたるこんにやくを入れ、箸

にてかきまわして、よく玉子を浸みさすなり、

次に玉子焼なべに胡麻の油をしき、火にかけ、あ

つくあたゝまりたる所へ、玉子をしみさせたる蕨

蕨を入れ焼くなり、少しこげめ付く程焼けたる時

箸にてうらかへし、又一方を焼くなり、

角、或は三角などに程よく切りて、器に盛るべし、

小猪口 林檎あへむきみ、

あさりむき身を、目簀などへ入れよくあらひ、鹽

湯にてざつと湯煮し、直に又簀などへ入れてしづ

くを切り置く、

りんごは、皮を剥ぎ、おろし金にて摺りおろし、

直に鍋に入れ、砂糖、鹽、等を加へ、火にかけ木

杓子にて煉る、  
右のむきみを、煉りたるりんごの中へ入れ、箸に  
てかき合て、盛るべし、

## 文苑

○春　望　肥塚南山  
此處彼處みかへるおもはかすみつ、

錦色そふ麥ふなの花

○山　吹　前野壽賀子

行春をしはしといめてわし垣の

八重山吹は咲き出でにけり

○春　風　若海保子

かけろふのをの、百草おしなべて

緑ふかむる春風ぞふく

○閑座春雨　横田やな子

つれくと訪ひくる人を待わびて

なかめくらさん庭の春雨

○春　月　横田秋足

伊吹おろしまだ寒けれど浅妻の

渡りにかすむ春の夜の月

○水邊柳　小島平

いなむしろ河をひ柳ふく風に

○山家鶯　鹽野奇零

波もわやかる心ちこそすれ

梅かはる風のためよりにさそはれて

○おさな子　郁子

軒の櫻はほころびて

卵の花匂ふ垣のもと

でんく太鼓や犬張子

いつしか母の膝により

乳房ふくみて幼な兒は

可愛ゆき笑窪たへへつ

髪き世の科も人の身の

神にも似たる姿して

汝が少さき其胸は

來る髪影もなく

尚清らかに澄みぬらん

春をば送り秋を迎へ

重き務をつくせかし

天は汝を守るなり

蝶の羽風もいと優に

緑の芝生に打ふして

楽しく持ちて遊びしが

うすくれなゐの唇に

楽しい遊びを夢みてか

安さねむりに入りにけり

犯せるつみも稚兒は

愛のしとねに打ふせり

過し涙のおともなく

谷の清水のそれよりも

尙其まゝに幾度の

いと安らかに人の世の

幸多き世を送れかし

自然は汝を慰めん

# 春の旅

千歳子

左様！ 今頃になつて思ひ出すのは忘れもやらぬ  
明治三十九年の春休みの旅行です、前年來受持つ  
て居た幼児等が目出度幼稚園の遊びを卒へて小學  
校へ行くことに成つたので、新入兒の入園するま  
で、茲暫く重荷をゐろした心地、此の呑氣な休日  
を住みなれた都のうちに過ごして終ふのも惜しい  
事と京阪地方に獨旅と洒落れ込んだのでした  
金入れの底をたゝいて旅行哉  
書生時代は眞に氣樂なものの、風暖かに花も間もな  
く咲き出でんとする臘月夜、茗溪河畔の假住居を  
あとにして午後十時卅分と云ふに新橋より汽車に  
乗り込んだのです。丁度三月三十日の晩のこと、  
て、女高師新卒業生の關西に赴任する人々は暖か  
母校の懷を離れ冷き社會の風にもまるゝべく此車  
中に乗り込んだのも少なからず、殊に休暇の常と  
て學生の歸省する數多くて随分混雜合つて居たの

でした、緋の着物に全じ羽織、袴はカシミヤの畫  
少し過ぎたるを、肩には軍人用のズツクの鞆を掛  
け込んで、是も中古の洋傘一本を持ち懷中には金  
はたつぷり、腦中は無一物、まことに幸福な旅行  
よと思ふにつけても座る君父師の高恩を謝さるゝ  
のでした、品川の夜の海に漁火ちらほらと見渡さ  
るゝも心地すがくしく、大森と云ふ聲に背て遊  
びし八景園の間の帳に包まれたらんを思ひ浮べな  
どして三ッ四ッ五ッと驛又驛を過ぎ行くうちにい  
つしかと眠りに落ちて興津蒲原何とやらむ遠くは  
三保の松原も唯夢の間に打ち過ぎ、濱松といふ車  
掌の聲に驚き覺めたのは翌朝七時過ぐる頃でした  
用事あつての旅ではなし、見たい所を見て行けよ  
と、まづ此處で降りて該町民が赤心籠めて造り建  
てたる凱旋門を潜り道行く人に物尋ねつゝまづ高  
等女學校を見に行つたのです、其が在所も知らず  
校長なる人の姓名さへ知らぬに随分頓狂なる事よ  
と思ひましたが、ナニ旅の恥はかき捨てよと若い  
時分は元氣なものの朝飯も食はずに町はづれる高  
女校に行つたのです、素より春休みの事ですから



生徒一人居りませんが、ずん／＼門内に入つて行つたのです、玄關に行つて音づれて見ても誰も出て来ず、小使室らしい方へ廻つて聲かけたら一人の女が不思議さうな面持で出て来ましたから名刺を出して「東京から来た者です」とまづ驚ろかしてやりますと案の状「マア御一人です」と云ふのでした「此度東京から竹内先生といふ方が此方へ見える筈でせう」と新卒業生の赴任地を知つてゐるから聞いて見ると「ハイ其の御方の荷物がモ！届いて居りますのです、では貴方様は竹内先生と御同校で、では、△△先生も御存じて御座いませう」と態度一變まことに舊知己の人の様になつて親切に校内を案内して呉れ且つは同女がたつての勧めで校長某氏の御宅にも御邪魔し△△氏にも面會し何かと町内の教育状況を承はり次いで町内第一の小學校をも參觀したのです此小學校は随分大きくて児童數がなんでも千五百か二千位もあつた筈でしたが確かなことはモ！毫碌して忘れてしまひました、此地で有名なのはピアノの製造場のあつた事と帽子製作の盛んなのださうで巴里あたりの

ペーバを附けて東京で賣つて居る帽子は多く此邊でつくるのだといふ事です、是れ又見て歩いたらモ！十一時すぎたのですが未だ朝飯が食へんのです武士の子も流石に空腹に困うじましたが御茶の水の清き空氣に育てられた女學生の片端だものどらして／＼縄暖簾などが潜れませう、其儘瀝車に乗り込んで今度は三州岡崎へ行つたのです岡崎には同卒業の友人が師範の女子部に居るのです此町で面白いのはステーション前が相當に賑はしい町であるから是れが岡崎かと思ふと是から鐵道馬車で殿橋といふ處まで行き其れから先の町々が本當の城下なことでした、殿橋で降りて知らぬ町中を覺束なげにくねり廻り目ざす女子部をたづねますと是も亦町はづれ、其の上其附近は焼土のやうな地味なので春日和とは申しながら殊に暑いのですお腹は空く足は疲れる、斯様なると大事なく軍用靴も捨たくなりませうけれども、左様かというて紫の袴の手前何様しても例の暖簾は潜れぬのでした。該女子部の校舎は却々立派な新築でしたが地方の學校は何れも地面が充分なので庭や運動場

がいかにも廣々として羨やましいなど生意氣な事を考へて大玄關の前に立ち例の名刺を差し出さうかと思ひましたが一コ、一番不意打して友人を驚かしやるのも面白い」と疲れ切つたうちにも何處か呑氣な所があるのです、デク、デクした女使が来て來ましたから「△△先生は？」と問へば「唯今舎監會議で」と答へるのです。去年迄は身生徒の監督の下にありし人の「思ふと小供相手に無邪氣に暮す保姆の我身にはなんだか噴き出さずに居られなかつたのです」「何一寸した用事で來たのですから濟んだら緩り會して下さい名は云はすもわかるですから」とまづ寄宿舎の應接間に案内させて待つて居たのです、ところが其會議がまた大へん長いので終うとく居眠りを始めました頃入口の戸がギューと開くと共になつかしき友人の顔があらはれたのです、豫め何の通知もしてないのですもの東京三界から此の短かい春休みに岡崎下りまで誰がやつて來やうと思ひませう、如何にも驚いたといふ表情で「アラマア」と云うたきり私の頭から足の先まで見降すのです多分魂のみが來

たのかと裾の有無を見定めたのでせうよ、よく來たでせう？「マア例の元氣には」と互に袂別以來の物語りに中々時のたつのも知らぬのでした寄宿舎も新築の完備したので随分廣い花壇もあり庭の中より遠近の山嶽を臨めるやうになつて居て女生徒が浩然の氣を養ひ得る様な心地ゆたかな設備なのです、舎は此友人といふ一人の先輩とで萬事監督をやつて居るとの事で歸省せぬ數名の女生徒の手傳ひで友が整へし種々の珍味に舌鼓打つた後は廣々とした花園に萌え出づる若草を踏んで共に將來の希望を述べ現在の愉快を語りて過ぎ去り易き此一夕を惜んだのです、友は其夜神に向つて此の會合を感謝した様で「無論基督信者ですから翌くれば四月朔日、早朝旅仕度を急いで友と共に岡崎城址に赴いたのです、郊外と云うても舍よりは程遠からぬうちとて徒歩で一見公園の如き樹木鬱たる小道に入りますとやがて城趾につくのでした高く低く積み上げられたる石垣の幾白星霜、風雪に曝され雨霖に冒され今尚朽ちずに居る様は昔徳川の本城たりしより劍戟閃々幾多の勇士が血を

流せし凄し歴史を語らんとするもの、様に見られ  
 ました城趾の中に設けられたるさゝやかなる社の  
 傍、紅なる桃花一もと饗し顔に匂ふのも三河武  
 士の内助たりしやさしき婦人等の面影に似たるに  
 遙か彼方帯のやうに輝くのは矢矧川だと友が申し  
 て居りました、限りなき今昔の感に話ます、興  
 に入り今暫しと友の引き留むるをもまたの折に再  
 び會はんと辭して此度は腕車僱て徳川氏先祖八代  
 の墓なる大樹寺といふに香手向け更に蜘蛛手の八  
 ツ橋見んとて舊東海道筋を進みましたが道の兩側  
 には老松列をなして緑の隧道過ぐる心地なのに、  
 車上風ゆるやかに日影暖かく濃美平原の一部とや  
 見渡さるゝ廣き田畑の麥青く菜の花黄金色に、都  
 にて薔で別れた櫻の花も此處には早今盛りにて森  
 の木蔭、陋屋の軒端などにちらほら匂ひ出でたる  
 飽かずめでたり、果ては昔諸大名が參勤交代の行  
 列の様など思ひ浮べて獨り笑ひに入つて居るうち  
 二時餘りにして八ツ橋寺に着いたのです、古びた  
 る堂宇の見るから昔愁ばるゝに坊近く咲きそへ  
 ると女椿の人まち顔なるに心引かれて案内乞へば

老僧立ち出で、萬づまめやかに昔し語りするに旅  
 の勞れも打忘れ心千年の昔に馳せて左中將が風流  
 の面影忍びそが自ら物せられしと云ひ傳ふる阿保  
 親王其他の像どもを始めかさつばたに名得たる池  
 をも見、さて引きかへして安城のステーションよ  
 り例の汽車にて名古屋へ行つたのです、此處にも  
 同級生が二人ほど奉職して居るのです、名古屋は  
 三府に次ぐ大都會ですから今更そが見物話しもよ  
 しませうが、友の宅に靴を捨て置きしまゝ旅の勞  
 れも休めずには有名な金城を見に行つたのは、よせ  
 と云はれても御話したい事の一つなのとす、一名  
 古屋の城の金の鯨鋒！とは三歳児の時から聞いて  
 て居た事、どんな美觀か？、今其を見るのだと思  
 ふと心も空に馳け出したのは丁度夕方の五時すぎ  
 で豆腐屋などの忙はしげに行き交ふ頃でした、第三  
 師團に屯して御國を守る兵士が吹き送る夕暮の喇  
 叭の音に道を辿つて兵營近く進みますと時恰も日  
 露戰役の終局を告げた折として白衣を纏ふた幾多の  
 傷病兵が新設された假收容所の窓近く暮れて行  
 く春の夕べを打ち眺て居るのでした、都を離れて

から數多き凱旋門に送り迎へられ通り／＼つて此處まで來りました。が悲壯なる思ひになやむ傷病兵に遇つたのは是れが始めてゐたから我身の幸福に引かへて彼人々が心情あはれ深き何となく誠めらるゝ心地して此の旅も徒らに愉快を追ふの念に驅られず何物をか收得すべきものぞよとの嚴かな聲が心の底に響いたのでした。兎角して城の後方なる練兵場にはまはりし時はすでに午後の六時でした。から行き來の人も漸く絶えてさらぬだに心靜まる。春野の夕ぐれ清く豊かなる大濠の水際に立ちて近く氣高き五層樓を仰ぎ、花やかなる夕陽に金色更に燦然なる天主閣屋上の美觀に心奪はれしあの時の愉快はまた忘れ難い一事でした。歸途程近き招魂社に詣で散々路を間違へて友の宅に歸つたのは餘程夜更けてからの事で其夜は十二時過ぎるまで語りあかし翌二日にはまづ縣立の高女を參觀し次いで生意氣にも縣廳に参り教育課の吏員に當市幼稚園の様子などを話して貰つて市立幼稚園といふのをたづねまづ久々に愛らしき幼兒等に接する期を得たのでした。保育者の方々も中々よく研究

なされて居らるゝ様子で種々の標本成績其他の研究材料を惜しまずに見せて下さつたのは何より嬉しい事でした。名古屋は流石は大都會で此幼稚園を始め邦人の手に成れるものも外國婦人の設立に係るものもあるとの話でしたが始めて當方へ旅行した事として京坂地方へと心せかれ保育狀況の大略丈を聞いて市中の見物を致した確か？ 同日の午後二時すぎ名古屋をたつて奈良へ行くべく關西線に乗つたのでした。(續く)

春の聲

松の家

柳の眉の深みどり

花の口紅うるはしく

霞の衣を装ひて

早蕨の手に足引の

山は笑へり鶯と

蛙の歌も面白や

浮かれて遊べ人々よ

春守る神の我が姿

名は佐保姫と呼ぶ鳥

# 雜 錄

學校衛生學列國彙報の減價提供 萬國學校衛生會議本部に於て發行する同彙報は今回特別減價契約を行ふ由にて本會客員三島博士より別紙の如き通牒有之有志の諸君は直接購讀申込まる可し。

拜啓 餘寒甚しく候處、益御清榮奉賀候。陳

ば昨四十一年十二月二十九日附を以て、在エルサス州ミールハウゼン市の友人グリースバハ博士より別紙の通り依頼致來り候處。若し御厚意を以て貴會發行の「婦人と小供」紙上餘白へ御掲載の上、御披露被成下候は。獨り我が學校衛生學の普及上に利盛するのみならず。又同學諸君の爲にも、多少御便宜の事と信じ候。依つて甚だ勝手がましき儀には候へども、此段許容被成下候やう、別して御依頼申上候勿々 敬具

東京丸の内幸町一ノ三

萬國學校衛生會議列國永久委員會  
本部日本事務局ニ於テ

明治四十二年二月 三島 通良  
フレール會御中

## 草 案

○學校衛生學列國彙報の特別提供○學校衛生學列國彙報は、獨逸學校衛生學會會頭グリースバハ博士の編纂に成り、毎年四冊宛を發行し、英佛獨三ヶ國語を以て世界各國の學校衛生に關する論説を掲載する、有益の學術雜誌なるが、萬國學校衛生會議列國永久委員會本部は、先般該彙報を以て、本會議及列國永久委員會の機關雜誌とする事に決議し、同時に該彙報の購讀者に、便宜を與へん爲め、發行書肆との間に、特別減價の約束を爲したるに就き、此趣を、汎く同學諸氏に披露せられたき旨、三島博士に依頼し來りたる由。其方法は左の通りなりと。

學校衛生學列國彙報直接購讀減價の約定

(3) 學校衛生學列國彙報は、英佛獨の三國語を以て編纂し、毎年四季一冊宛を發行し、一卷を四冊六百四十頁とす。

(2) 右彙報を、直接左記の發行者に注文して購讀せらるゝ場合に限り、一ヶ年の購讀料を金拾馬克とす。

但し他の書肆の手を経るものは、従前の通り金貳拾馬克なり。

Internationales Archiv für Schuhygiene 直接購讀申込書肆  
Wilhelm Engelmann, Leipzig (又: Masson, Paris; Mac Millan London.)

(1) 此特別減價は、直接購讀者の數二百名以上に達したる時より始めて尙ほ百名以上を増す毎に、購讀料を漸次遞減すべき條定とす。

(4) 此の減價購讀方法は、本年發行の、學校衛生學列國彙報第六卷より之を實施す。

(5) 直接購讀者の氏名は、之を彙報上に掲載すべき筈に付此際速に直接購讀の申込みあらん事を希望す。

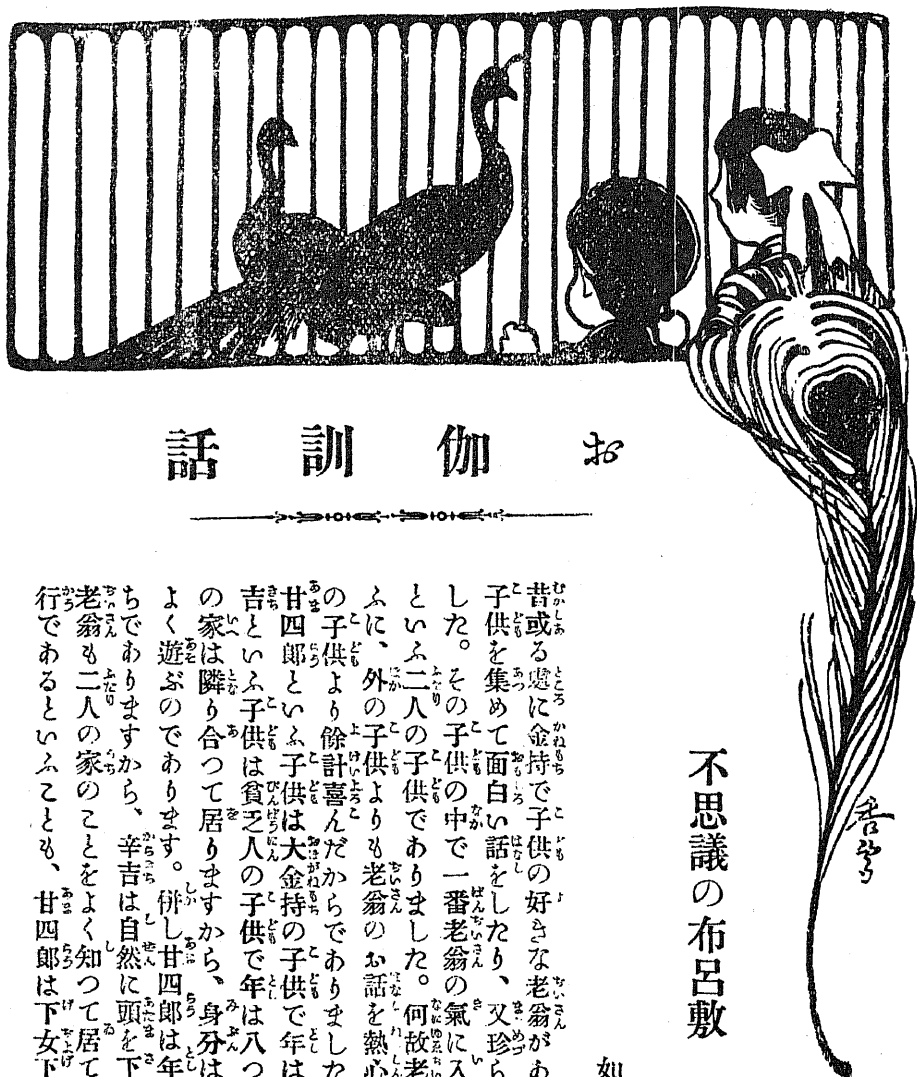
●二葉幼稚園の受賞 野口幽香子女史の經營する二葉幼稚園にては這般文部省より多年慈善事業に貢献する所を以て金參百圓下賜せられたる由

●日本兒童研究會總會 同會にては本月一日帝國大學法醫學教室にて總集會を開らる左の如き演說等ありたりと云ふ。

- |                        |                 |
|------------------------|-----------------|
| 一、兒童の遊戯と身體の發達          | 醫學士 富士川 游君      |
| 一、女學生と迷信               | 醫學士 森田 正馬君      |
| 一、兒童の金錢に對する觀念          | 文學士 吉田 圭君       |
| 一、兒童の睡眠時間              | 醫學士 藤井 秀旭君      |
| 一、兒童の結核に就て             | 醫學士 藁科 松伯君      |
| 一、兒童と文學                | 文學士 倉橋 惣三君      |
| 一、兒童ニ及ボス社會的「ミリウ」の價值ニ就テ | 文學士 ドクトル 澤木 伊重君 |
| 一、演題未定                 | 文學士 菅原 敏造君      |
| 一、個性と教育                | 文學士 吉田 熊次君      |
| 一、兒童と宗教                | 文學士 田村 直臣君      |
| 一、記憶の個人的形式に就て          | 文學士 速水 滉君       |
| 一、一人子の教育               | 醫學士 千日 亮君       |
| 一、神經衰弱性精神病             | 醫學士 森田 正馬君      |
| 一、體質患者の一例              | 醫學士 永井 潛君       |
| 一、演題未定                 |                 |

- 一、兒童の繪畫に就て 高島 平三郎君
- 一、兒童言語障礙に就て 醫學博士 三宅 礦一君
- 一、私生兒 三田 啓君
- 一、演題未定 醫學博士 富 士川 游君
- 一、兒童の精神病 醫學博士 榑 保三郎君
- 一、兒童の惡戯に就て 文學博士 吳 秀 三名
- 元良 勇次郎君

●本會主幹の轉任 本會主幹として永く本會の爲めに盡されたる東京女子高等師範學校教授兼附屬幼稚園主事、中村五六氏は本月二日奈良縣師範學校長に轉任せられたり。同氏は明治十七年東京師範學校を卒業せられし以來中途兩三年地方に赴任せられしことの外、前後二十餘年間終始我幼兒教育の爲めに盡され、夙に我國に於けるフレーベルを以て目されたる人なりしが今回再び地方に赴任せらるゝことゝなれり。本會は幹事會の決議に因り同氏多年の効績に對し聊か謝意を表する爲め銀時計壹個を贈呈したり。



## お伽訓話

### 不思議の布呂敷

如 柳 子

昔或る處に金持で子供の好きな老翁がありました。時々近所の子供を集めて面白い話をしたり、又珍しい物を呉れたりしました。その子供の中で一番老翁の気に入つたのは甘四郎と辛吉といふ二人の子供でありました。何故老翁の気に入つたかといふに、外の子供よりも老翁のお話を熱心に聞き、物を貰へば外の子供より餘計喜んだからでありました。

甘四郎といふ子供は大金持の子供で年は十一歳であります。辛吉といふ子供は貧乏人の子供で年は八つであります。此の二人の家は隣り合つて居りますから、身分は違ひますが、何時も中よく遊ぶのであります。併し甘四郎は年も上であり、家も金持ちでありますから、辛吉は自然に頭を下げて居るのであります。老翁も二人の家のことをよく知つて居て、辛吉は柔順で親に孝行であるといふことも、甘四郎は下女下男に侍かれて時々我儘

をいふといふこともよく知つて居るのであります。或る日老翁は常時の通りお話が済んでから、他の小供を皆歸して仕舞つて、廿四郎と辛吉ばかり残しました。二人の子供は老翁が如何するかと思つて居ると、老翁は二枚の布呂敷を持つて来て、二人に向つて言ふには

御前方二人は何時も熱心にお話を聞くから今日は特別の御褒美を上げます。これは誠に面白い御褒美であります。併しこれを上げるに就て約束して置くことがあります。この約束を守らなければ御褒美は何の役にも立たない。そこで第一此の御褒美は二人で取換へてはいけません。又他の人に見せてはいけません。それからこれは一年に一度、三年に三度しか遣ふことが出来ない。三度遣へばそれで此の布呂敷は無くなつて仕舞ふそれからこれを遣ふには、誰も見て居ない廣い部屋の中で二三度振り廻はすのである。そうすると自分の好きなものが出て来る、大層面白い布呂敷だから、其の積りで大事にしないさい。だがこの布呂敷は一枚は錦の布だから大層高い立

派なもの、一枚は木綿の布で然も汚れて穴さへ穿いて居るのだから誰が貰つても否なもの、これを私が分けてやれば恨みつこが出来から、じやんけんか鬨取りにじやう、じやんけんにしやうか、鬨にしやうか。

斯ういつて老翁はニコ／＼笑つて居ます。そうすると廿四郎はじやんけんがいゝといひました。辛吉は鬨がいゝといひまして、老翁さんも大層困つた様子でしたが

「じやんけんがいゝ、初めじやんけんをして、それから鬨をする、それで定りが付かなければ、私が決めてやる。」

そこで、二人共一生懸命、腕に力を入れてじやんけんをしようと、廿四郎が紙で、辛吉が石、辛吉の負となりました。今度は鬨となりましたが、廿四郎の勝となつたので、廿四郎が先きに布呂敷を取ることにしました。

老翁さんは、どちらでもお前の好い方をお取りといふと、廿四郎は喜び勇んで錦の布呂敷を受取りました。辛吉の方は悄々として汚穢布呂敷を受取



そして二人して有難うといつて各自家へ歸りました。切て家へ歸つてから、汚穢ない布呂敷を貰つた辛吉の方は戸棚の中へ仕舞つた切り久しく忘れて居ました、それも其の筈木棉の汚れた穴だらけな布呂敷ですもの、併し老翁の言つたことは本統だと思つて居ますから、辛吉が慾の多い子供なら、それを振つて見るのでせうが、欲が薄いものだからツヒ忘れて居ました。廿四郎は奇麗な花のやうな風呂敷なものですから、自分一人部屋へ這入つてソツト出しては眺めて喜んで居ます。併し廿四郎は慾が深いものですから、たつた三度しか振れないのですけれども、振つて見たくて仕方がありません。そこで或る日自分は立派な大きな家が欲しいと祈りながら、その錦の布呂敷を二三度振りまいたら、自分の住んで居る家が、何時の間にか、今迄よりもズツト大きくなつて、三階も出来、藏も出来、西洋間も出来、天井はのこらず合天井でも出来、上は皆絨氈が敷いてあり、立派な油畫もあれば、銀の花活もあり、お庭まで廣々として、色々

美しい花の咲いた木も澤山あるのであります。廿四郎はこれは不思議だ、お父さんや、お母さんは何處に居らつしやるだろう、お竹やお松は何處に居るだらうと、方々のお座敷を駆け廻つて見ると奥の八畳の真中に黒檀で拵へた長火鉢の側に錦の布團を敷いて、お父さんもお母さんもニコ／＼して坐つて入らつしやる、臺所の方へ行くと、お父さんは銀の釜で飯を焚いて居る。三疊の間でお松は自分の衣服を総つて居る、其の他書生部屋、車夫部屋、客間、離れ座敷、何處から何處まで奇麗つくめで、何から何まで揃つて居る。廿四郎は夢でも見た様な氣がした。今まで自分の家は中々立派だと自慢して居たのだが、それよりは十層倍も立派なのである、それから早速辛吉の家へ来て辛吉君僕は老翁さんから貰つた布呂敷を振りて大層立派な家を拵へたから早く見に来たまへ辛吉は往つて見て、廿四郎の驚ろいたよりも驚ろいた、それは辛吉は廿四郎の家を見てさへ、其の立派なのに見取れて居る位だから、こんな家を見ては眼を廻はさんばかりであつた。

そこで辛吉は自分の家が狭い／＼とお父さんがい  
つものいふから、矢張り家が欲しい。サア自分も老  
翁から貰つた布呂敷を振つて見たくなつて、匆々  
家へ歸り前の布呂敷を出して、誰も見て居ないと  
ころで、自分も好きな家が欲しいと祈りながら、力  
を入れて二三度振つて見たが、汚い布呂敷から塵  
埃が立つばかりで、立派な家は愚か、瓦一つ出な  
い、辛吉は落膽した。落膽したけれども、貧乏に  
慣れた身だから左程悔みもしなかつた。

ところが不思議なことがある。學校で相撲を取る  
のに何時もは同じ年のものにも負けた辛吉は、布  
呂敷を振つた翌日は、同じ年のものを負かした、  
これは面白いと思つて年上のものと相撲取つたが  
これも負した、廿四郎とも取つてわけなく投げ出  
した。それから十五位の肥つた方のある中學校の  
生徒位のものとも相撲を取つて見たが、これもコロ  
リと投げて仕舞つた。辛吉は何だか不思議に面白  
くつて溜らない、早速家に歸つて

「お父さん、私は力持ちになつたよ、相撲取ろ  
うか、本氣になつて相撲取らないか」

辛吉のお父さんは初めに嘘言だと思つて相手にし  
なかつたが、餘り五月蟬いふものだからそれじや  
一つ取つて見やうといつて、辛吉と取組んだとこ  
ろが、二三度ゆすつたかと思ふとお父はグデンド  
ウと倒された、これは可笑しい怪我だ最一度取  
るといつて、お父さんは一生懸命になつたが、辛  
吉の手が障つたかと思ふと倒されて仕舞つた。

さあこれから辛吉は力を出して見たくて仕方な  
い、或る時は馬の倒れたのを起してやり、或る時  
は電車の外れたのをレールに戻してやつたり、驚  
ろくばかりの力が出たのである。

辛吉が力が出てから一月ばかりたつた頃、廿四  
郎の後の家から火事が始まつた。廿四郎は餘り火  
が側なのと、立派な家が焼けさうなのに、氣が狂  
つて何一つ形付けることも出来ない、加之に直ぐ  
に火が付く位で、手傳に來るものも間に合はない  
一番先きに駆け付けたのが隣の辛吉であつたが、  
辛吉は大八車二つ一度に兩手で引つ張つて來て一  
度に箆筥五つ六つ長持三つ四つといふやうに擔い  
で來て、これを大八車に積んで一度に二つの車を

引いて呉れたものだから半分程の道具は助かつた  
併し家は丸焼けになつて跡形もない。辛吉の家と  
甘四郎の家の間には廣い庭があつたから辛吉の家  
は焼けないで済みました。甘四郎のお父さんは仕  
方がないものだから、前に居つた家よりも小さな  
家を立て、其の中に住むやうになつた。  
甘四郎は辛吉が恐ろしい力の出たのは全く老翁の  
布呂敷を振つた爲めだと覺りました。けれども取  
替へることの出来ぬ約束であるから、今更如何す  
ることも出来ない、大層後悔しました併し自分も  
力の出るやう祈つて布呂敷を振つたら屹度力が出  
ると思ひました。それから一年経つて翌年、例の  
通りソット一ト間で錦の布呂敷を振りましたが、  
こんどは自分の祈つたものは出ないで、自分の着  
て居る衣物が大層立派に變りました。自分の祈つ  
たものでないから不平でありましたが、誰でも甘  
四郎に出逢ふものが、其の着物の立派なのを見て  
奇麗だ奇麗だと褒めるものだから、自然得意にな  
つて此の着物さへあれば、人が大騒ぎやつて呉れ  
るから、力がなくとも心配がないと自惚るやうに

なりました。  
辛吉は前にも言つた通り、元々慾のない子供であ  
りますから、別段何が欲しいと思ふ譯ではありま  
せんが、前に布呂敷の御蔭で力が出たのを喜んで  
居りましたから、甘四郎が二度目に布呂敷を振つ  
た話を聞いて、自分も前の通り人の見ないところ  
で、二三度例の様に布呂敷を振りましたが、前と  
同じ様に何も出て来ません。けれども、前にも何  
も出ないと思つたのに力が出たのでありますから  
今度も何か出るだらうと、其の験のある日を待つ  
て居ました。間もなく其の年の秋になりましたが  
辛吉は何日頃に暴風雨が起つて、自分の家の邊に  
洪水が出るといふことを自分に曉りましたから町  
中の人に之を知らせました。處が初は誰も本統に  
しなかつたのでありますが、辛吉は全く老翁から  
貰つた不思議の布呂敷を振つた爲めに、恐ろしい  
力持ちになつたのだから、其の證據に布呂敷を見  
せやうと思つたが、さて老翁の約束で人に見せる  
ことが出来ないで、困つて居りましたが、甘四  
郎は火事のと き辛吉に助けられた恩があるもので

すから、辛吉のいふことが本當だといふことを吹聴して歩きましたので、これは本統かも知れないといつて、町中の人が大勢かゝつて、川の土手を高く築き上げました。處が其の後辛吉のいつた日限に暴風雨が起つて川の水は、非常に殖えたので築き上げた土手を最少しで越しさうになつたのであります。それですから若し辛吉が前に此のことを知らせて呉れなかつたら町中は皆水の爲めに流されて仕舞つたのでありませう。さあそれから辛吉は何でも知つて居るから、分らないことがあつたら辛吉に聞くがよいといふことになりしました。そこで毎日毎日辛吉のところへ何か聞きに来るものがある。病人のある家の人が来て、私のところの病人は死にませうか、助かりませうかと尋ねる辛吉は助かりますと答へた。すると其の病人は助かつた。子供の居なくなつた處の人が来て、私のところの子供が急に見えなくなりましたが、何處に居ますかといふと、これは山に隠れて居るといふので、其山を尋ねるとチャンと辛吉のいつた通り隠れて居た。辛吉は何でも知つてゐる、非常な智

慧が出た。此の様になつたのは全く布呂敷を振つた爲めだと思ひました。廿四郎の方は綺麗な着物を見せびらかして喜んで居ましたが、或る晩盜賊が這入つて来て、其の大切な着物を盗んで往きました。翌日になつて、サア大變と大騒ぎになつたのであります。すこしも分りません。そこで何でも知つて居る辛吉に尋ねるがよいと思ひまして、辛吉の處へ来て、「僕の大切な着物が無くなつた、僕は智慧がないから、捜すことは出来ない、君は屹度布呂敷のかげで大層な智慧が出たのだらうから、君なら屹度分る、分つたら君は力があるから其の盜賊を捕へて呉れ玉へ」それは氣の毒だ、併しその盜賊は今其の着物を泥の中へ棄てて仕舞つてある、この盜賊は、君の衣物が欲しいのではない、君の意張るのを不平に思つて居るもの、したのだから、泥から拾ひ出したところが、汚穢で役に立たない。廿四郎は辛吉の言つたことが本當だと思ひましたから、悲しくなつてワット泣き出しました。辛吉

はいろ／＼慰めました。そして着物などは、火に  
 焼け水に漬ると類みにならないものである。家も  
 其の通り火に遇ひ水に遇へば役に立たなくなるも  
 のであると教えました。

第三年目になつては甘四郎も大分覺つたと見えて  
 布呂敷を振つて見やうといふ考も出ません、とこ  
 ろが辛吉は智慧があるものですから、此の布呂敷  
 を三度目に振つたならば如何なものが出るかとい  
 ふことを自然に曉りました。それでこれを甘四郎  
 の布呂敷と取替えてやりたいと思ひましたが、さ  
 て約束ですから取替える譯にいきません、兎も角  
 も後に甘四郎に教えてやらうと思ひまして、例の  
 様に布呂敷を振りました、そして其の効験のある  
 日待つて居たのですが、老爺のいつた通り、其  
 の時切りボロ布呂敷は見えなくなりました。  
 甘四郎は辛吉が三度布呂敷を振りて、布呂敷が消  
 えてなくなつたことを聞きましたので、早速辛吉  
 のところへ來まして

「君は今度は何が出たのだよ、君は非常な智慧が  
 出て、何でも先きのことで分るのだから、大

方布呂敷を振らない前から知つて居たのだらう  
 一體何が出たのだよ。

「イヤこれは君に今言つても分らない、今に君の  
 ところへ出たものがあると、自然に僕のところ  
 へ出たものが分るのだよ

「ソレはいよ／＼不思議の布呂敷だネ、そんなら  
 僕が眼に布呂敷は何が出るか教えて呉れ玉え。

「ソリヤ僕は布呂敷の御蔭でチャンと分つて居る  
 が、君は僕にその出たものを自由にさせて呉れ

ゝば言ふがネ、如何だへ

甘四郎は暫く考へましたが、辛吉には恩があつて  
 今は何事でも辛吉を兄のやうに思つて居るものだ  
 から、決心して次の様に返事をしました

「ソリヤ君の自由に任せるよ、君は力だの智慧だ  
 のといふ、焼けも沈みもせぬものを授かつたの  
 だから、到底も適はないよ、向の自由に任せる  
 から、出たものは君の勝手にし玉へ

「そうかそれじゃ、先づ早速君のところへ往つて  
 布呂敷を振ることにしたいな。

「出たものが辛吉君の勝手とあれば、僕今聞いた

ところで面白くないナア、それぢや、是からいつて振らう

そこで二人して甘四郎の家へ行きましたが、素より一人で振らねばならない約束でありますから、辛吉は甘四郎を部屋に入れて錦の布呂敷を振らせました。

處が甘四郎は驚いた、ヤア大變々々といふので、辛吉も部屋に這入つて見ますと、部屋一杯金銀の小判であります。今のお金でいへば何拾萬圓といふので、甘四郎は喜んで、これさへあれば、何でも好きなものが買へるといふと、辛吉は約束だから僕の勝手にするといつて、それから其のお金を何でも正直で貧乏して居るものを探し出して與へることにしました。甘四郎も初めは少し不平な顔付きをしましたが、正直で貧乏な人が俄かに幸福を受けて喜ぶ有様を見て、非常に愉快を感じる様になり、これから辛吉と一所に、其のお金を施して歩くやうになりました。さてこれを讀んだ皆さん方、辛吉が三度目に布呂敷を振つて何が出たのか分かりますか。

(これでおしま)

# 我等の園生 (修身の歌の曲)

- 一、我等の園生に春來れば 鶯來鳴き蝶は舞ひ  
赤や黄色や色々の 草木の花の花ざかり
- 二、我等の園生に夏來れば 緑の葉影そよくと  
たもと涼しくもる共に いざや遊ばん歌つゝ
- 三、我等の園生に秋來れば 黃菊白菊咲きみちて  
高きこみ空を風のまに 舞來る紅葉の三つ五つ
- 四、我等の園生に冬來ば 白雲降りつむ庭の面  
燦めく朝日の美しく はやも作らん雪だるま

## フレールベル館る

### フレールベル館とは何ぞや

- 一、フレールベル館は九段中坂の上角にあり。
- 一、フレールベル館は現代に於て最も進歩せる幼児教育思想の普及を計り兼ねて幼稚園教育の開祖たるフレール氏の徳を頌せんとす。
- 一、フレールベル館は東京女子高等師範學校内フレール會指導の下に立つ。
- 一、フレールベル館内にはフレール會玩具研究本部を置かる。
- 一、フレールベル館は玩具、幼稚園恩物材料。手工用具材料及び運動具等家庭教育に關する用具及び材料の總てを研究し實費を以て之を販賣す、
- 一、フレールベル館は廣く内外の玩具を蒐集し之を分類して見本を陳列し以て取捨撰擇に便にす從つて永く店頭に曝したるものを販賣せず。
- 一、フレールベル館は九段土產東京土產として最も適當したる教育品を廣く蒐集販賣す。

フレールベル館主幹

高市次郎

謹白

(每月五日發行)

婦人小報 第九卷第四號

(明治三十四年一月廿八日)  
(第三種郵便物認可)

# 各女學校御用

## 美術造花材料一式

半製品及鋸打拔類

## 摘細工材料

絹縮緬及金銀毛氈  
寫真臺紙柱掛

## 瓶細工材料

刺繡用絲及針

東京市本郷區眞砂町十五

卸小賣 百花堂 木村喜兵衛

地方御注文ハ代金引替ニテ郵送ス營業目錄御報次第郵送ス

明治四十二年四月一日印刷  
明治四十二年四月五日發行

編輯 兼東京市小石川區竹早町七十二  
發行者 和田持直印刷者

東京市神田區錦町三丁目熊田印刷所內  
日下主計發行所

女子高等師範學校內  
フレイバー會